

釣れ釣れなるままに

2004年思い出の釣行記 PART. 2

サビキでホッケを釣る。

増毛港にて

鹿島釣狂

☆釣行日	平成16年5月1日(土)2日(日)		
☆釣果	ホッケ	35cm以下	9
	アブラコ	30cm	1
	真ガレイ	手の平大	11

柳に風

16年の大型連休は1日から5日までの5日間であった。息子や娘も連休の前半には帰省することになっているので、久しぶりに家族での釣りをと考えていた。

「風吹けば峯にわかるる白雲のたえてつれなき君が心か (古今和歌集)」

女房だけを誘っても、「柳に風」、「暖簾に腕押し」とばかり一蹴されること間違いないが、息子や娘と一緒にとなると重い腰を上げざるを得まい。

予報では連休の前半は天気がよく、後半は崩れるらしい。前日、手っ取り早いところで息子に電話で誘ってみると、父の思いを敏感に察したのか二つ返事で乗ってくれる。しかし、娘の方はイマイチ乗り気ではない。私に言わせればセンスの悪い今時のファッションを買い漁りに札幌の街へと繰り出したいらしい。女房もそれとばかりに娘の方に同意した。女の方は歳が増すにつれて扱いが難しくなる。結局二手に分かれて連休を楽しむことになった。

行き先は増毛港をと考えていたがどの様な状況になっても対応できるようにと様々な釣り道具を二人分準備しておく。連休前日は仕事上の会合で飲み会があり夜遅くなるので、女房の方は子どもたちを迎える準備にとそそくさと岩見沢の自宅に戻って行った。私の方は、二日酔いの頭を抱え、1日午前9時に岩見沢に向けて出発したが、自宅に到着したときは、女房たちは早々と出かけた後だった。



釣りエサなどの準備を整え、デンコウドウ前のラーメン店で昼食をとってから遅い14時、増毛港に向けて出発した。途中、茶志内のコンビニに寄って飲み物を調達し、息子と運転を代わりビールをグビッと一気に飲み干す。息子は運転が苦にならないらしい。むしろ、普段は軽乗用車なので排気量の大きい車を運転できることが楽しいのだ。安全運転を促しながら15時過ぎには増毛港に着いた。

早速、港周辺を探索する。岸壁はホッケのサビキ釣り師で埋め尽くされており、入る隙間は全くない。数日前からの時化で港の中にホッケが入り、昨日まで釣れ続いていたそうである。釣り場を増毛港としたのは、新しい職場の若い同僚から港の中でフライを駆使してホッケを釣ったことを聞かされていたからである。

彼はフライマンで主にイトウを狙って道北や道東にまで遠征しており、ホームグラウンドは朱鞠内湖らしい。職場にそんな人間がいるとは頼もしいかぎりである。しかし、私を誘えと言っているのだが「はいはい」と空返事ばかりで1度も誘ってくれた試しはない。ジャンルの違う釣り人を敬遠しているのだろう。フライマンは特にその傾向が強いように思われる。一人での釣りよりも仲間がいた方が楽しいと考えるのだが、私を老人の足手まといと感じているのかも知れない。

「風吹けば峯にわかるる白雲のたえてつれなき君が心か」

濃密な一時

16時、外防波堤の中間部に釣り場を設定する。投げ釣りするスペースも確保でき、近くでウキ釣りやサビキ釣りをしている人が数人いたからである。この辺りまでホッケが回遊しているらしい。息子に飲み物等を買に行かせている間にホッケの浮き釣りの準備をする。息子が戻り仕掛けを振り込むと、二人同時にアタリがあつてホッケが上がる。幸先がよく本日の釣りが楽しいものになる予感がした。しかしその後は、付近の釣り人がポツラポツラと釣果を上げているに対して私たちはアタリも来ない。何が違うのだろう。エサだろうか、仕掛けだろうか、サビキの方がよいのだろうか。準備した道具やエサを様々に変えてみても結果は同じであった。

投げ釣りを用意して遠投する。手のひら大の真ガレイがぼつらぼつらと釣れる。外海側ではテトラポットに乗って投げている御仁がおり、釣果を伸ばしている。防波堤先端部は増毛港で一番のマガレイのポイントだそうで、これもやはりテトラを越えて遠投している。取り込みはテトラを伝って先に出て行かねばならないので、かなり危険な状況である。その中間部に平らで具合のいいテトラが空いていたおり、取り込みもその場でできそうなのでそこに三脚を移動させた。忘れた頃にマガレイやホッケが釣れたが、暗くなってからも状況は変わらず、21時に本日の部は終了する。

遅い夕食は、増毛の有名店である『寿司の松倉』に向かった。丁度暖簾を下ろしているところだったが、無理を言って開けてもらった。息子がトイレを使用している間に奮発して2500円の特上寿司を2人前注文した。私としては大いに気を利かせたつもりなのだが息子が戻ってきて「俺はエビ天井」と言う。店主に注文して2人前を作り始めていることもあり特上寿司で我慢(?)してもらおう。

その後、港に戻って駐車してある車の中で睡眠をとる。息子はすぐに大鼾をかき始めて爆睡の様相だが、こちらは酒を飲んでいるにもかかわらず眠れない。ようやくうつらうつらし始めた時に息子の携帯の目覚ましで起こされた。

頗る天気がよい。息子は防波堤先端部から内海側に向けて2本の竿をセットする。私は少し戻って安全なテトラの上から外海側に向けて2本の竿をセットする。しかし、釣れない。とにかく釣れない。

10名ほどの大集団の親子連れがやって来て防波堤一面に展開した。小学6年生ぐらいの女の子が私の目の前のテトラの穴でやり始めた。間もなく、大きく竿を曲げながら叫んでいる。穴を覗き込むと見事なアブラコが水面上で暴れている。しかし、魚体が水面を切ったところで大きく反転し、ハリから外れてテトラの穴に落ちていった。今度は父親らしき人物が交代してさすがに釣り上げてしまった。散らばっていた大家族が集合し、褐色の見事な魚体に歓声を上げ、釣り主に対する賛辞を送っている。「私のアブラコなんだから」と言う女の子に、父親も「うん、うん」笑顔で応えていた。

息子たちが小さい頃はこの家族と同じようによく釣りに出かけ、1匹の小さな獲物に喜々としていたものだ。私は子どもたちや女房に何とか釣りの楽しみを味わってほしいと思い、自分の釣りは全くできなかった気がする。女房にすれば「あなたは、すぐに自分の釣りに没頭してしまって、家族のことなどほったらかしにしていました。」ということらしいが・・・。

息子が7時にはやめようと言っていたのを8時まで引き延ばしたが結局魚は釣れずに終わった。帰日も息子に運転を任せ、私はビールを飲み飲み春の惰眠を貪った。久しぶりに息子との濃密な一時を持てたと思うのは私一人の思い過ごしなのかも知れない。

☆釣行日 平成16年5月5日(水)
☆釣果 ホッケ 35cm以下 92

ホッケ祭り

3日、4日と続いた強風と雨が止み、晴天となる。港の中にホッケが入り、カレイ類も活性化していると思われる。女房を釣りに誘うが、やはり素っ気ない。

「風吹けば峯にわかるる白雲のたえてつれなき君が心か」

11時には砂川を出発し、12時過ぎに増毛港に到着した。前回と同じように岸壁はサビキ釣り師で埋まっており、防波堤の先端も投げ釣り師で溢れている。どうしたものかと岸壁をぶらぶら歩いていると、新十津川町に住む同僚が奥様と一緒に釣りをしていた。丁度、クーラーが満杯になったので引き上げるという。奥様はよほど釣り好きなのであろう、旦那が片づけている間も見事な竿裁きでホッケを釣り続けていた。我が女房にもこの姿を望んでいるのだが・・・。

その場所に入れさせてもらう。ホッケのサビキ釣りの準備が覚束なく、アミエビを入れるバケツを借りる。バケツの中にはアミエビも残っており、さらに半分使った袋物の寄せエサもおいていってくれる。もちろんサビキ仕掛けもある。奥様の分とあわせて2本をそのまま2号の磯竿に付けるとすぐにアタリがありホッケが釣れ続いた。

昼食は釣り仕度を終えてからと考えていたが、その暇がない。途中、仕掛けが絡まり10本バリエを3本にして続けるが影響はない。もう一本の竿も3本バリエにして打ち込み、絡まりを解く必要がない分能率がよくなる。

右隣に入っている釣り人は1本バリエでの宙釣りである。エサはマグロの切り身で、3.6m程の短竿を2本用意し、1本の竿にかかったホッケを取り込んですぐに振り込み、もう1本の竿にかかったホッケをあげる。無駄な動きがなく、これを順次繰り返して釣果を伸ばしている。ホッケが群れているときにはこの方が手返しが早くなり効率のよい釣りができるのだ。

私の方はというと5.4mの磯竿が長すぎて扱いずらく、岸壁の際を泳いでいるホッケに合わせて竿先しか出していないため後ろに下がっての取り込みとなる。2本のホッケがかかると魚を外すために一旦竿を置かなければならないので、その内にホッケが暴れて仕掛けを絡ませる。ホッケが3本もかかると抜き上げられなくて結局魚をバラす羽目になっていた。

私の左手の釣り人が引き上げ、代わりに家族連れが入った。狭いところに4本ほど竿を出し、袋物のマキエを撒いているが魚の寄りは余りよくない。私のところまで来ていたホッケがUターンしている有り様だ。子どもが釣れないと父親に駄々をこねている。子どもの方を私のそばに入れて、アミエビをその近くに撒いてやる。すぐにホッケがかかったのだがそのホッケに走られてしまい、辺りの竿の仕掛けが一斉に絡んでしまった。子どもの方は釣れた魚に歓喜の声を上げたが、家族の方は平謝りである。何度か同じことをしてし

まったので、さすがに家族も居たたまれなくなったのだろう、早々に引き上げてしまった。

夕暮れとともに釣り人は徐々に立ち去ったがホッケは釣れ続き、バツカンがホッケで満杯になり、エサも撒き餌もなくなった午後6時に終了する。本日も『寿司の松倉』で特上寿司を食べて帰宅した。運転を代わってくれる息子はいないので美味しいビールはオアヅケであったのが唯一心残りではあったが、本日の釣果に大満足をして凱旋する。

【つれづれ】

○次の日、早速、職場に魚を持って行った。玄関先に「増毛のホッケです。ご自由にお持ち帰り下さい。新鮮さだけは保証します。」の張り紙を付けておいておく。帰りにはバツカンが空になって片づけてあった。これなら、大会参加で釣り上げた大量(?)のアブラコやカジカを持ってきても大丈夫だろう。フン、フン。

○その日の内にとホッケをさばき、物干しに干す。風が出てきたこともあり3時間程度で表面が輝きだし、ほどよい状態になる。

○5月3日の午後に帯広に向かう息子を見送ってから、札幌市立病院に再入院した父を見舞う。体調がかなりよくない。帰りにあいの里に寄り、ホッケの開きをおいてくる。